

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32693

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K19707

研究課題名（和文）日本におけるマスギャザリング対応に必要な看護ケアの体系化

研究課題名（英文）Systematizing Nursing Care for Mass Gatherings in Japan

研究代表者

三浦 英恵（Miura, Hanae）

日本赤十字看護大学・看護学部・教授

研究者番号：40588860

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,700,000円

研究成果の概要（和文）：マスギャザリングは「大規模なイベントやスポーツ競技会、コンサートなど多くの人が集まることにより人々の興奮、熱狂、会場環境、アルコール等が原因となり、多数の傷病者の発生や感染症が蔓延する可能性」として社会的・人為災害の一つであり、対策が必要である。しかし、災害看護学の教科書では、自然災害に関するものが多く、マスギャザリングについては触れられていないため、看護職の知識の習得と対応力の獲得が急務である。日本での新型コロナウイルス感染症の流行、ラグビーワールドカップや、東京オリンピックの経験を経て、様々な文献や報告書などから情報収集し、日本におけるマスギャザリング対応に必要な看護ケアを体系化した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

マスギャザリングに対する看護職の危機意識は十分ではなく、日本の災害看護学の教科書にもその内容は触れていない。日本は東京オリンピックなどの大規模スポーツイベントも経験した。マスギャザリングは、行われる場所、時間、環境がわかる場合は、周到に準備することにより減災すること、あるいは未然に防ぐことが可能である。看護職は、ボランティアや大規模イベントに関わる可能性もあり、看護職へのマスギャザリングの教育が必要かつ急務である。自然災害を中心とした災害看護学に対して、「マスギャザリング」という観点から看護ケアを体系化することは、社会の国際化が著しく進展していることから大きな意義を持つと考える

研究成果の概要（英文）：Mass gatherings are large-scale events, such as sporting competitions and concerts, at which large numbers of people gather, leading to the possibility of large numbers of people being injured or becoming ill and of the spread of infectious diseases as a result of factors such as excitement, enthusiasm, the venue environment, or alcohol. As such, they are a type of social, man-made disaster, requiring a response and countermeasures. However, most textbooks on disaster nursing deal with natural disasters without touching on mass gatherings, and there is, therefore, an urgent need for the nursing profession to acquire knowledge and gain the ability to respond to such situations. Following experiences in Japan such as the spread of COVID-19, the Rugby World Cup, and the Tokyo Olympics, we collected information from a range of literature and reports to systematize nursing care that takes into account the necessary cultural background and diversity to respond to mass gatherings in Japan.

研究分野：災害看護学

キーワード：看護学 マスギャザリング 感染症 災害 教育的介入

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

マスギャザリングとは「大きなイベントやスポーツ競技会、コンサートなど、多くの人が集まることにより、人々の興奮、熱狂、会場環境、アルコールなどが要因となり多数の傷病者の発生や感染症が蔓延する可能性」として社会的災害、人為災害の一つとして定義され、対策と対応が必要である。日本では2019年にはラグビーワールドカップ、2020年には東京オリンピック・パラリンピックの開催を控えており、世界中からの訪問者の急激な流入出による健康危機管理が求められ、文化的背景を考慮した多様なケアが必要である。

しかし、日本はグローバル化が進んでいるにも関わらず、災害が起きるごとに外国人への対応も課題となってきた。日本は数々の自然災害を経験し、住民の防災意識は年々高まり、国、地方公共団体における防災対策、医療機関での備えも強化されてきた。災害看護学の中でも人命救助が優先される急性期のみならず、中・長期にわたる人々の生活支援を中心とした看護の知が構築されている。しかし、マスギャザリングに対する看護職の危機意識や知識も十分ではなく、日本の災害看護学の教科書にもその内容は触れられていない。

近年、社会の国際化が著しい進展を続けるとともに国際的なスポーツイベントを控え、来日外国人観光客は急増している。特にマスギャザリングは行われる場所・時間、環境が分かっており周到に準備することにより減災すること、あるいは未然に防ぐことも可能である。看護職はボランティア、医療支援という形でオリンピックや大規模イベントに関わる可能性が高く、看護職のマスギャザリングに対する知識の習得と対応力の獲得が急務であると考えた。

2. 研究の目的

本研究は日本におけるマスギャザリング対応に必要な看護ケアを体系化することを目的とした。マスギャザリングに関する文献、ガイドライン、報告書、学術機関、国際機関からの情報を収集、ケアニーズを明らかにする。更に国ごとに異なる多様なケアニーズの把握と対処方法を集積する。教育プログラムをケア提供者・対象者別（看護学生、看護職、地域住民など）、ケア提供場面（競技会場、病院、クリニック等）やニーズに応じて検討する。教育内容と情報提供マップの妥当性や有用性を検証し、ラグビーワールドカップや東京オリンピックなどの国際的なスポーツイベントの状況を踏まえて、最終的にマスギャザリング対応に必要な文化的背景、多様性を考慮した看護ケアを体系化することを試みる。

災害看護は緊急対応だけでなく、人々の日常的に潜む健康と生活におけるリスクに対するレジリエンスの強化を支援することを目的としており、人々の生活と健康状態を対象とし、特徴的なニーズを把握しながら人々の生活を支援する活動である。看護職への教育および看護職による市民に対する啓蒙活動により、マスギャザリングへの対応を強化することにつながり、来たる国際スポーツイベントの安心安全に寄与すると考える。また、看護学、特に国際看護学、災害看護学に加え、公衆衛生学など、学際的な取り組みにより実装性のある教育プログラム開発と革新的なソリューションにつながる人間科学的アプローチを構築できる可能性がある。

3. 研究の方法

過去の国際的マスギャザリング、異文化看護に関する論文、報告書、学術機関、国際機関から発信されている情報やガイドラインなどを収集する。マスギャザリングに関する資料の収集と分析を行い、看護上の課題を明確化する。特に、Public Health for Mass Gatherings: Key Considerations (WHO, 2015) に挙げられている健康増進と住民への情報提供、疾病管理と集団発生時の対応、リスク・クライシスコミュニケーション、イベント会場での医療提供、水と食品の安全、災害の備えと継続計画、環境衛生への考慮、化学的・生物学的、放射性物質のリスクなど、健康危機につながる内容、要因を抽出し、分類・整理するとともに、看護ケアの関連について検討を行う。更にマスギャザリングの知識を必要とする看護職の特性、時期、ケア提供場面、対象者の文化的背景の情報も分類、整理する。

マスギャザリングに関しては過去の大規模イベント(オリンピック等)の経験の蓄積もあるため専門家に専門的知識の提供を求め、国際的マスギャザリングのケアニーズ、ケア内容の充実化を図る。収集、分析した情報をベースにしたケアニーズの把握とその対処方法を蓄積し、マスギャザリング対応に必要な看護職や看護学生向けの教育プログラムと住民や日本への来訪者向けの情報提供内容を検討する。構築した教育プログラムを実施し、WEB アンケート調査、フォーカスグループインタビュー等からプログラムの評価を行う。

4. 研究成果

2018年度に行ったマスギャザリングに関する文献レビューでは、検索データベース「PubMed」にて「mass gathering」と「nursing」を掛け合わせ、検索期間は限定なしにしたところ34件がヒットした。タイトルレビューを行い、研究課題に関連しない13件を除き、21件が該当文献として抽出された。内容は、マスギャザリングの On-Site Care に関するもの(6件)、マスギャザリングに対する看護師の認識に関するもの(1件)、マスギャザリングのシステマティックレビュー

(1件) マスギャザリング時の疾病やケア内容の記述や予測(6件)、マスギャザリング時のトリアージ(3件)、マスギャザリング時(感染症について)の看護師への介入プログラム(1件)、マスギャザリングの群衆の認識(3件)であった。先のキーワード検索による文献数は、2019年は5件、2020年は21件と急増し、2021年は24件、その後文献数は減少したが2022年は10件、2023年は9件であった。Covid-19感染症の流行とともに、国際スポーツイベントの開催により、マスギャザリングに対する関心が看護職においても高まったことが推察された。

2019年1月15日には、イスラエルのOdeda Benin-Goren氏へのヒアリングを行った。Odeda Benin-Goren氏は、正看護師で、救急看護認定看護師であり、世界保健機関(WHO)のアドバイザーを務め、ウクライナの緊急事態への備えと保健システム改革、およびWHO/国際協力機構(JICA)ワーキンググループのメンバーとして、緊急事態における医療チームの報告基準を策定した。イスラエルの医療の状況や、国連人道問題調整事務所(UNDAC-OCHA)の下で国連災害評価調整官の経験や医療センターの緊急事態対策部長の経験から、Mass Gatheringにおいて看護職に必要な知識と教育プログラムコンテンツについて助言を得た。ケア提供者は、人びとの文化の多様性を理解することが重要であると話されたが、教育プログラムにどの程度、文化の多様性のコンテンツを盛り込むことは、検討が必要である。

WHOが当初、2020年2月14日に発表し、何度かバージョンアップされた「Key planning recommendations for mass gatherings in the context of COVID-19」を抄読し、日本災害看護学会第22回年次大会で「マスギャザリングにおける看護職を対象にした教育プログラムの開発」の交流集会の中で発表した。この文書は、国際的な大規模イベントの主催者に対してCovid-19の感染リスクを抑制するためのガイダンスを提供することが目的と書かれていた。看護職は直接的な主催者ではないが、大規模イベントに関するリスクファクターを認識し、それを軽減するための対応能力の一角を担う重要な役割があると解釈できた。特にリスクを軽減するための対策を講じることが重要であり、看護職として「リスクコミュニケーション」にかかわっていくことが示唆された。手洗いや感染防御の方法など、ソーシャルメディアを活用してリスク軽減に貢献できるような能力を修得できるように、教育プログラムに盛り込む必要がある。

ラグビーワールドカップ、東京オリンピック・パラリンピック2020を経て、看護職がMass Gatheringに対する知識や関心がどのように変化したか、Covid-19の流行による医療逼迫と看護職をはじめとする医療職者への影響を加味し、調査を行うことが現実的にできなかった。そのため、国内外の論文や、国際機関から発信されている情報、公的機関や学術団体によるホームページなどから情報収集し、看護ケアを検討していくこととなった。看護ケアの体系化までは導くことができなかったため、現在も分析を継続している。Mass Gatheringという概念ではなかったが、Covid-19感染症の流行と拡大を受けて、多くの人が一室に会する集団感染のリスクがクラスターという言葉とともに、国民にも周知されるようになった。3つの密や衛生対策の重要性は看護職にも「知識」として広まった。そのため、必然的にマスギャザリングに関する準備性が高まる機会となったが、Mass Gatheringで問題になるのは、感染症のことにとどまらない。オリンピック、パラリンピックに向けて救急災害医療体制に係る学術連合体(コンソーシアム)も結成され、準備が進められた。一方で、競技会場などオンサイトでの医療体制の整備がされていても、観客として来日する外国人は、体調不良時、地域の病院やクリニックにWalk inで来る可能性もある。高澤ら(2021)もマスギャザリング医療を考える上では、ステーキホルダー以外の地域住民などのイベントに参加しなくても影響を受ける集団「ペナンブラ」に着目する必要性を述べている。また、世界各地で戦争や紛争が起きている現状があり、Mass Gatheringにおいてはテロを想定した看護職の知識の向上も必要である。Mass Gatheringは、国際的視野からThink Globally、つまり着眼大局に考えていくことが重要であるが、Act Locally、すなわち着手小局で地域の看護職も含めた視点で教育プログラムを構築できるように、今後も看護ケアの体系化に向けて、分析を進めて行く予定である。

<引用・参考文献(ホームページ)>

- ・ World Health Organization (2015). Public health for mass gatherings: key considerations. <https://www.who.int/publications/i/item/public-health-for-mass-gatherings-key-considerations> [2024/06/16 閲覧]
- ・ World Health Organization (2020). Key planning recommendations for mass gatherings in the context of COVID-19. <https://www.who.int/publications/i/item/10665-332235> [2024/06/16 閲覧]
- ・ World Association for Disaster and Emergency Medicine. <https://wadem.org/about/board-of-directors/odeda-benin-goren/> [2024/06/16 閲覧]
- ・ マスギャザリングイベント等に係る救急・災害医療体制を検討する学術連合体. <http://2020ac.com/> [2024/06/16 閲覧]
- ・ 高澤祐治、山田睦雄、田島卓也、守屋拓朗、佐藤晴彦、東原潤一郎、外山幸正、中村明彦(2021). メガスポーツイベントにおけるマスギャザリング医療. 日本臨床スポーツ医学会誌, 29(3), 331-333.
- ・ 国際イベントに参加する一般市民・ボランティアの方のためマスギャザリング感染症ナビ. https://www.shionogi.com/jp/ja/sustainability/informations-for-id/msg_navi.html [2024/06/16 閲覧]
- ・ 国際マスギャザリングにおける疾病対策に関する研究. <https://plaza.umin.ac.jp/massgathering/index.html> [2024/06/16 閲覧]

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 宮前 繁、佐々木 康介、谷本 美保子、藤井 直樹、周東 美奈子、池本 めぐみ、神原 咲子	4. 巻 22
2. 論文標題 報告 日本国内で死傷者が発生したマスギャザリングイベントに関する文献検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本災害看護学会誌	6. 最初と最後の頁 40～50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11477/mf.7008200559	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 神原咲子	4. 巻 65巻4号
2. 論文標題 新型コロナウイルスとの共存 災害避難と感染症対策	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 生活と環境	6. 最初と最後の頁 9-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 宮前 繁、稲垣 真梨奈、藤井 愛海、小林 賢吾、佐々木 康介、酒井 彰久、神原 咲子、日本災害看護学会 若手アカデミープロジェクト	4. 巻 22巻2号
2. 論文標題 緊急レポート COVID-19災害プロジェクト COVID-19対応における若手アカデミープロジェクトの活動	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本災害看護学会誌	6. 最初と最後の頁 112-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田中加苗、佐々木吉子、三浦英恵	4. 巻 21巻3号
2. 論文標題 学童後期だった人々が20年後に語る阪神・淡路大震災の人生への影響	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本災害看護学会誌	6. 最初と最後の頁 75-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 神原咲子	4. 巻 101(6)
2. 論文標題 【災害と地域医療 明日への備え】サポートシステム 災害時の個人情報と空間地理情報を利活用した健康管理	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 治療	6. 最初と最後の頁 733-736
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hamadate Yoko, Sasaki Yoshiko, Miura Hanae	4. 巻 印刷中
2. 論文標題 Actual conditions and challenges of disaster preparedness faced by companies in Chiyoda City, Tokyo	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 SANGYO EISEIGAKU ZASSHI	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1539/sangyoeisei.2018-021-B	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 3件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 三浦英恵, 宮前繁, 佐々木康介, 神原咲子
2. 発表標題 マَسギャザリングにおける看護職を対象とした教育プログラムの開発
3. 学会等名 日本災害看護学会第22回年次大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 神原咲子
2. 発表標題 減災ケア活動の可視化と地図化と連携
3. 学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石田千絵
2. 発表標題 災害復興に実装される看護科学
3. 学会等名 第40回日本看護科学学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 神原咲子
2. 発表標題 グローバル化社会における災害リスク軽減と看護
3. 学会等名 日本災害看護学会第20回年次大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐々木 康介, 藤井 直樹, 宮前 繁, 谷本 美保子, 周東 美奈子, 中島 麻紀, 有坂 めぐみ, 神原 咲子
2. 発表標題 日本国内で発生したマシガザリングの健康障害に関する文献検討
3. 学会等名 日本災害看護学会第20回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 南 裕子, 山本 あい子, 神原 咲子, 内木 美恵, 千葉 理恵, 小澤 若菜
2. 発表標題 仙台防災枠組みを踏まえ、改めて看護からBuild Back Betterを考える
3. 学会等名 日本災害看護学会第20回年次大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Sakiko Kanbara, Shoko Miyagawa, Hiroyuki Miyazaki (Chapter8 Hanae Miura, Sakiko Kanbara)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 355
3. 書名 Disaster Nursing, Primary Health Care and Communication in Uncertainty (Sustainable Development Goals Series), 分担執筆 Chapter8 The Sendai Framework and the Bangkok Principles for Nurses, pp77-85	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	神原 咲子 (Kanbara Sakiko) (90438268)	神戸市看護大学・看護学部・教授 (24505)	
研究 分担者	石田 千絵 (Ishida Chie) (60363793)	日本赤十字看護大学・看護学部・教授 (32693)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------